

「全鍍連」 2020年 3月号 巻頭言

全鍍連 情報・国際委員長 金森 秀一

(株)オジックテクノロジーズ 代表取締役社長



「ポーっと生きてんじゃねーよ！」

ある政府系金融機関のブロック会議の記念講演で女性講師が聴衆に冒頭問いかけた。「社長の仕事で一番大切な仕事は何でしょうか？」人材育成、技術開発、事業承継など日頃取組んでいることが皆さんの頭に浮かぶだろう。すべて正解だと思われるが、女性講師の解答は私が社長を30年やってきて感じていることを端的に表す言葉だった。

弊社は1947年創業。主要な事業は農機具部品、次に半導体リードフレーム(以下LF)、次に半導体製造装置部品やパワーデバイス基板(以下PD基板)や精密電鍍と変遷してきている。1989年私が社長に就任したときはLF事業が売上の8割以上を占めていた。事業の偏りに危機感を感じ事業の多角化に就任直後から着手したがWindows95などのシステムソフトウェアが大量のメモリーを必要としLF事業は多忙を極めた。しかしこの好調さも1995年を過ぎると様相が一変する。海外勢の台頭と接合技術の技術革新が弊社を襲った。LF事業は激減し2002年には受注がゼロになった。その危機を救ったのはPD基板だった。91年から試作開発を繰り返し97年くらいから少量であるが量産が始まり、ハイブリッドカーや世界的高速電車需要で2000年頃にはある程度の量産規模に成長していた。LF事業からPD基板事業にシフトし危機を免れた。事業には寿命があり、事業が元気なうちに新しい事業の種まきが必要な事を学んだ。

さて先述の女性講師は数多くの百年以上続いている企業の経営者にインタビューを実施している。そこで得られた結論は社長の一番大切な仕事は「会社の未来を創る仕事」だった。この30年間もがき苦しんできたのは確かにそれだった。妙に納得できるフレーズだった。

では「会社の未来を創る仕事」をどの様に見つけて行けばいいのだろうか？弊社の場合は半導体製造装置は企業誘致、PD基板は情報発信、精密電鍍はものづくり補助金がそれぞれの起点だった。そしてそれらは偶然出会ったという感じのものだった。2000年ノーベル化学賞を受賞した白川英樹さんはセレンディピティ(Serendipity)と言っている。しかしそれは簡単に起きるものではなく、それに至るまでには膨大な努力が払われている。経営においてもその確率を高め必然に近づける努力が必要だ。例えば国の成長戦略を分析、関わる企業や大学の調査、関連ある学会に参加、地域経済との関わりを分析、関連する企業誘致を行政に提言、産業技術センターへ関連技術開発の要請、それぞれの委員会交流会への参加等々、やるべきことを戦略的に実施し必然性を高めたい。本当に社長の仕事は大変であり、やるべきことは山積みだ。

交流会に出てもコンパニオンとお酒を飲むだけで何にも考えてない社長さん、チコちゃんに叱られますよ！

(因みに登場の女性講師は経済ジャーナリストの内田裕子氏。チコちゃんじゃありません。念のため。)